

校長室だより～和光高校今昔 第36号 H27.1.9

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

男子バスケットボール部の奮闘

暮れの大掃除の際、事務室倉庫から1枚のパネルが出てきた。男子バスケットボール部の関東新人大会出場の記念パネルである。ぞんざいな扱いであったことが知れると武井先生に殴られてしまうので、罪滅ぼしの意味も含め校長室に飾らせてもらっている。

昭和57年にラグビー部の関東大会出場が途切れて以来、60年のソフトテニスインターハイ出場など個人での活躍はあったものの団体競技の県外大会の出場は絶えていた。この間、どこの部も部員不足に悩んでおり、学校自体の活力が一時に比べかなり減退していた。いきなりこの低迷ムードを破ったのが平成2年の今井剛を中心とする男子バスケット部新人チームであった。ヘッドコーチ武井・アシスタントコーチ増田の猛烈な練習に耐え、全くのノーマークからの快進撃であった。PTAだより第42号（平成3年3月9日発行）に武井のコメントが掲載されている。少々長いが以下に全文を示したいと思う。



「四年目の開花」

男子バスケットボール部顧問

武井正人

埼玉県男子バスケットボール界の全国レベルはベスト8以内。決して低いレベルではない。和光高校が2回戦で対戦した浦和学院高校には全国中学で日本一になった選手が4人もいる。そんな強豪校が200校近くひしめく中での第2位。決勝戦も決して負けてはいなかった。そして初の関東大会出場。関東一都七県の16チームの中で埼玉代表として戦う。

さて、このことはまぎれもない事実であり、我が和光高校男子バスケットボールチームの残した成果である。突然このように強くなった訳ではない。実は3年前、廃部同然のこ

のチームはゼロから出発したのである。その時の新入生8人、2年生の2人の計10人でのスタートだった。西部地区大会は1回戦負け。毎日の練習時間は約1時間。部員たちは中学校の経験はあるものの素人同然。強くなる環境も要素も何一つなかった。しかし、目標を立てて、コツコツと努力を重ねた。最初の目標はBブロック昇格、西部地区60チームの中位に入ることだった。1年目に見事この目標を達成し、次なる目標は県大会出場。2年目に和光高校男子バスケットボール部としては11年ぶりの県大会出場を果たした。ちょうどその頃から、都立北野高校と知り合う。同じような境遇のチーム同士、互いに励まし合い教え合い切磋琢磨していった。その過程で色々なチームが集まるようになった。加わるチームのレベルも高くなり、その中で和光の男子も強くなっていった。3年目はあと一步で目標を達成できなかったが、その現3年生たちの努力を見ながら現在の主力である2年生が成長していった。1年間の総試合数は200試合を超える。相手も関東大会レベルの強豪校。決して優秀な人材がそろったわけではなくそれこそ素人同然の一から出発したチームが頑張ってくれた。

「やれば出来る」本当にその通りになった。監督としての私も選手達も本物の自信を身に付けていった。人生のうち最も輝いている時を共有している気がする。

武井は同じ号で3年担任として卒業生に贈る言葉として次のように述べている。

「なせば成る、なさねば成らぬ成るわざを、成らぬと捨つる人のはかなき」とは、私の故郷、山梨が生んだ名将、武田信玄の残した名句である。私は先日、指導する男子バスケット部が埼玉県で準優勝を遂げた時、この言葉の持つ意味を真実として感じ取りました。普段、教師は生徒に対し「どうせダメな生徒だから」と決めつけ、生徒も自分自身の可能性を信じる事が出来ず「甘え」に走る。結局お互いが甘えており、何一つ成長できない。例え1%の可能性でもこの句を信じ最後まで努力してもらいたい。

山梨の名門「日川高校」OB武井の真骨頂がここから見えてくる。

既に大井高校に異動しなおかつ長期入院中であつた私は、この報を新聞で知り大いに励まされたことを思い出す。暫くの停滞を破るこの快挙があつたからこそ、数年後の柔道部をはじめとする第2期の和光高校部活動黄金期が訪れたと思われる。この数年後、武井は惜しまれて和光高校を去った後、大井高校バスケット部を鍛え上げ県優勝そしてウィンターカップ出場を果たすこととなる。

